

#### 4. 不登校が増え続ける中で、コロナ禍に置かれた社会・学校・家庭の変化

不登校が京都府でも全国でも 過去最多になった状態の中で 京都と全国の学校現場はコロナ禍で「全国休校」と言う現実におかれたのです。学校と家庭がどんな状態におかれたのか、それはには どんな背景・原因があるのか？

##### <父母・保護者の生活の変化>

1. 一人親家庭・非正規親の家庭に急激な生活変化をもたらしました。仕事失う、収入が減少し生活困難な家庭が急激に増加した。その影響を 子どもは直接受けています。
2. コロナ感染の不安、精神的に圧迫感、閉塞感が親と子どもを襲っている。親や時には子ども自身がうつ病・精神疾患 またはその傾向に陥る子ども、親が増えています。そのために親が子どもの登校を止めたり、子どもが登校を渋る例がでています。(地域によって欠席扱いをしないとしている)
3. 親の生活困難・不安増加で、新たな子育て困難、余裕失う「虐待」が増加しています。生活の困難さから教育力が低下しています。

#### 5. 学校・子どもの変化、三害防止は 子どもの発達要求と逆行している>

学校再開、分散登校、おくれて新学期が始まったら、冒頭の詩にもあった子どもと教師に負担の多い「7 時間授業」、そして指導の困難な「マスク」「友達との距離」「黙食・黙清掃」指導、新しい「学校生活の規制」の中の子どもは変化しています。

1. 「三害を避ける」指導しなくてはならない教師の苦悩とその中の子どもの息苦しさが大きくなっている。「感染防止」マスク・友達と距離置く、会話制限、体育運動と音楽活動の制限。これらは子どもの発達要求と「逆行」していることを忘れてはなりません。子どもは子ども同士「ふれあい・対話して人間的成長」するものです。その発達論理に反する「指導」を「感染防止」のために、教師と子どもたちは進めているのです。「黙食・黙清掃」は「ゆがんだ道徳教育」の実践だったはずです。
2. 「オンライン教育」推進で宿題、家庭での負担課題が増加して、家庭の経済格差が「新しい教育格差」を生んでいます。コロナ禍ではオンライン教育は便利で重要です。しかし子どもの家庭事情の現状を配慮しないと新たな問題が発生しています。何より家庭経済状況の格差に各家庭の子どもへの援助が不可欠です。とりわけ小学生はオンライン授業の機器が与えられても「見守る親の環境」が保証されないと実施できないか、その授業が保証されません。その援助を担任教師に押し付けられたら教師は時間的にも肉体的にもつぶれてしまいます。
3. 「休校」の遅れを取り戻すというので、子どもの授業時間を6・7 時間に増やし教師と子どもへの負担が大きくなっています。「急激な遅れ取り戻しはしない」と修正した学校・教育委員会が増えましたが、まだまだ「授業時間 45 分を 40 分に短縮」「6 時間目・7 時間目授業」が続けられている地域・学校も残っています。そして「授業内容の密度を上げる」という名の「詰め込み」「過密」の授業が増えています。結局子どものゆとりある理解が軽視され、進路についていけない子どもを増やしています。

4. 子どもの学校生活が制限され余裕がへっています。新指導要領で「授業数は増やさず教える内容増加」で「休み時間」や「給食時間」が「5 分短縮」されたり「朝の会」「終わりの会」が短縮・回数減らすことが増えました。そのうえコロナ禍で「授業移動時間」が無くなったり「遊び時間」が短縮される学校が増えています。ますます学校生活に余裕が無くなってきています。あんなに「早く学校始まってほしい」と長い休校中願っていた子は 失望し学校生活から逃げ出したくなっているのです。

#### <今 新たな学校恐怖・不安、友達関係困難、家庭生活困難、新たな「不登校」問題の実態と課題を明らかにしよう>

以上コロナ禍の前年 2019 年度が京都府も全国でも「不登校が過去最多」であった学校現場に突然「全国一斉休校」が実施され休校状態が続き、年度末休校、分散登校、三害学校再開と今までにない学校生活が続いてます。そこで「子どもの現状はどうなのか」「子どもの中に何が起こっているのか」「不登校の子どもの変化は？」など考えていく課題が あらたにあります。新たな課題を提起します。

1. 親の感染不安から「登校させません」と親の登校拒否の実態、子どもの感染不安の実態とその影響の現れを把握する。その指導のあり方を考える。
2. コロナ禍での親の生活の変化、生活困難、不規則な生活習慣からのあらたな「不登校」事例とその指導をどうするか
3. 今まで「不登校」「登校しぶり」だった子どもの変化をつかむ。コロナ禍の休校中の不登校の子どもの思いはどうだったか。分散登校、学校再開で不登校の子どもはどうだったか。コロナ禍の不登校の子どもにどう対応するか。

(2021・5・8 京都教研「不登校」分科会提案より)

**不登校府内8年連続増**  
 小中学生 全国で過去最多18万人  
 京都府内の不登校児童生徒数は、2010年度の約10万人から、2019年度は18万人に増加した。これは過去8年連続で増加している。増加の要因として、コロナ禍による学校生活の制限や、家庭環境の変化などが挙げられている。

**児童生徒の自殺最多479人**  
 コロナ禍の影響で、児童生徒の自殺件数が過去最多となった。特に小学生の自殺件数が増加していることが懸念されている。

**府内14%減いじめ**  
 京都府内ではいじめの件数が14%減少した。これはコロナ禍による学校生活の変化や、教育委員会の取り組みによるものと見られている。

**コロナ予防 接触減要因**  
 コロナ禍の予防策として、学校での接触機会が大幅に減少した。これは授業形式の変更や、分散登校の実施によるものである。